まちの隠れた魅力を伝えたい

絵地図師・散歩屋

高橋美江

（聞き手／本誌編集長　岩見一太）

風情豊かな「まち歩き地図」が人気を呼んでいる。作者は、地図づくり、カルチャースクール講師、テレビ出演とひっぱりだこのグラフィックデザイナー、高橋美江さんだ。名刺の肩書きは「絵地図師・散歩屋」。その地図が持つ魅力の秘密を教えてもらおうと、東京・田端のアトリエを訪ねた。

手がけた絵地図は200点以上

――私が高橋さんの絵地図に興味を持ったのは、一昨年に上梓された『絵地図師・美江さんの東京下町散歩』を読んでからです。テンポのいい文章もさることながら、挿入されている地図が面白かった。本当に下町を歩きたくて仕方なくなりました。

高橋　ありがとうございます。おかげさまで、けっこうたくさんの人に読んでいただけて、続編もこの秋に出す予定です。

――付録の「ねぎし散策地図」がまたいい。傑作ですね。絵地図は、これまでに何点くらい描いたんですか？

高橋　200点を超えています。最初は、1993年に描いた横浜市瀬谷区の地図でしたね。

絵地図「浅草表玄関」（『絵地図師・美江さんの東京下町散歩』所収）

――もともとグラフィックデザインやイラストの仕事をされていたわけですが、初めて地図を描いた時は大分勝手がちがったでしょう？

高橋　思いのほかむずかしかったですね。ただイラストを散りばめればいいわけではなくて、土地利用現況図に基づきながら農地や宅地をちゃんと塗り分け、建物の位置や道路の幅なども正確に表現しなければならなかったんです。苦労したけど、この時の経験が私の絵地図づくりの原点になりました。

――今も描く時は、測量地図などをベースにするんですか？

高橋　ええ、完成までに数種類の地図を使います。まず取材の時に、都市計画図の写しなどを持って対象エリアを歩きます。そして、そこに地図に盛り込むべき情報をメモって、写真も撮ります。これを元にして、縮尺を考えながら構図を決め、実際に描いていくわけです。

正確な地図が機能するとは限らない

――なるほど。高橋さんの絵地図はとても自由だけれど、基本的な位置関係がしっかり押さえられているから迷わない。絵地図を描く時にも、やはり“正確さ”をしっかり意識しているんですね。

高橋　初めてそのまちに来た人が絵地図を持って思うように歩くことができなければ、地図としては失格ですから。かと言って、正確でありさえすればみんなが使ってくれるかというと、そうじゃない。大事なことは、使う人が興味を持つような情報を分かりやすく盛り込むことなんです。

――まちを歩く人が何に興味を持つかを考えながら地図をつくるということですね。

高橋　そう。道を省略することも、私の目線で発見した情報を盛り込むことも、すべて読み手を意識してのことです。絵地図を持ってそのまちを訪れる人に、たんなる通過点として通り過ぎようとするのではなくて、そのまちの個性を発見してもらいたい、そのまちを楽しんでもらいたいと思っています。そういう人たちに、どんな情報を、どんなふうに表現すれば喜ばれるのか。そうやって、読み手の気持ちを考えながら描いていくわけです。

私はいつも、「デザインは心理学」だって言うんです。地図も情報のデザインですから、情報の受け手の心理を探みながら作っていくことが大事です。

デザインは心理学

――高橋さんの絵地図を“情報のデザイン”という観点で見ると、実に豊富な情報が多様なスタイルで巧みに表現されているのが分かります。限られたエリアの地図の上に、驚くほど多くの情報が詰め込まれているのに、不思議とゴチャゴチャ感がな

NHKテレビで紹介されたユニークな立体絵地図の数々

い。デザインの妙ですね。

高橋　情報にメリハリをつけるように心がけています。イラストも文字も、いろんなサイズがあるでしょう。一つ一つの情報の重みによって大きさがちがうわけです。

そして、それらをどう提示したら読み手に心地良く届くかを、形と色で計算するんです。あとは、全体としてリズムが出るように配置していく。

――個々のイラストも味わいがありますね。建物や場所の特徴、雰囲気が伝わってくるから、どんどんイメージが膨らんでいく。

高橋　絵地図では、なるべく人を描き入れるようにしています。やはり、人が描かれていると読み手の目を惹きやすい。アイキャッチになるんです。

あとは、道具や紙も重要です。初期の頃に、横浜の郊外にある「寺家ふるさと村」という田園風景が残る地域の地図を依頼されたことがありました。それまでと同じく、洋紙にカラーインクとペンで描いたんではどうもしっくりこない。「寺家ふるさと村」に保存されている農村の原風景のイメージが浮き上がってこない。そこで、紙を和紙に替え、水彩絵の具を使って筆で描いてみたんです。すると、和紙独特のにじみやかすれが見事に昔ながらの田園風景の雰囲気とマッチして、柔らかいタッチの絵地図が描けました。それからは、その場所にふさわしいテイストを出すために、紙やインクやペンも選ぶようにしています。

――そうしたデザインの“技”が、その場所のイメージや雰囲気を生き生きと伝えることを可能にしているわけですね。

まち歩きの面白さを伝えたい

でも、そうしたデザインが生きてくるのは、まず高橋さんの中に“伝えたいもの”が溜いているからじゃないかと思うんです。『絵地図師・美江さんの東京下町散歩』を読むと、高橋さんは絵地図を描く前に浅草、向島、根岸、谷中といったまちを丹念に歩き、個性的なスポットや人物を掘り当てながら、そのまちの表情を鮮やかに捉えていたいったんだということが分かります。もっとも、絵地図を手がけた全国のまちについて同じように歩きながらその表情を掴んでいったとすると、これは大変な作業になりますが‥‥。

高橋　よく、そう言われます（笑）。地域性もあるので、作業のボリュームはまちまちですが、基本的なスタンスは同じです。まず実際に自分の足で歩いて、場所や人に直に触れて、そのまちの面白さを掴む。あるいは、そこにある「地域資源」を自分なりに探り当てる。もちろん、予備知識や参考情報も集めておきます。でも、それだけでは地図は作れない。まず自分の五感でそのまちや地域を体験し、その魅力を確かめる。それが私のスタイルなんです。

特に私はそこに暮らす人たちと話をすることが大事だと思っています。やはり地域のことは、地元の人に聞くのが一番。細かい情報が集められるだけでなく、そのまちに息づいている風情や習俗を感じとることができるし、歩いて読めるだけでは分からない地域の歴史や伝統なども、地元のお年寄りとの会話から学べたりします。そんなふうにしてまちや地域の個性、魅力を発掘していく作業は、とても楽しいんです。

――そうやって捉えたまちや地域の魅力が、さらに言えば、それを高橋さんが心から楽しんでいることが、絵地図から伝わってくるんです。読み手を引き込んで、そのまちや地域をどんどん歩いてみたくさせる高橋さんの絵地図の力は、そこから来るんじゃないかな。

高橋　確かに、絵地図を描いている時は、そのまちの面白さを伝えたいという気持ちが一番強いですね。

“ハレ”と“ケ”を見つめる“お散歩民俗学”

――絵地図だけじゃなくて、まち歩き自体に天性の（？）才能を持ってらっしゃるんですね。数年前からは、カルチャースクールのまち歩き講座でその“極意”を伝授しているとか。

高橋　“伝授”はおおげさですが、50代から上は80代くらいまでの生徒さんを引きつれて下町を歩きながら、まちの楽しみ方を伝えています。例えば、普段なら気にもとめずに通り過ぎているような公園や建造物が自分の見方を少し変えることでとても興味深いスポットになったり、気むずかしそうな地元の老舗のご主人にひとこと声をかけたら、まちの面白エピソードを滔々と語り出したり‥‥そんな体験を一緒に楽しんでいます。

――やはり、昨今はやりのタウンウォーキングなどとはひと味もふた味もちがうアプローチがあるわけだ。

高橋　民俗学で非日常を“ハレ”、日常を“ケ”と言いますが、私は自分のまち歩きを、「まちの“ハレ”と“ケ”を見つめる“お散歩民俗学”」と名付けているんです。浅草で言えば、浅草寺や仲見世といった観光スポットはみんなが知っている“ハレ”の場所。だけど、

『絵地図師・美江さんの東京下町散歩』（新宿書房刊）

この界隈に息づく江戸の風情などは、むしろ“ケ”のありふれた風景の中にある。そういった見過ごされがちなまちの魅力も掘り起こしてみたい、ということです。

――なるほど。“ハレ”と“ケ”はどこにでもあって、その両方にある魅力を見つけ、見つめることが、そのまちのイメージを豊かにする。そんなまち歩きをさらに続けて、楽しい絵地図をどんどん描いてくださいね。

高橋　はい。これからは、新しい絵地図にもチャレンジしていきたいと思っています。すでに農村地区の絵地図や立体絵地図にも取り組んでいるんですよ。

――面白そうですね。期待しています。今日はありがとうございました。

高橋 美江（たかはし みえ）
絵地図師・散歩屋。グラフィックデザイナー、イラストレーター。
東京生まれ。生粋の江戸っ子。実家は300年以上続く旧家。
武蔵野美術大学卒業後、グラフィックデザイナーとして就職するが、結婚を機に退職。子育てがひと段落した頃からフリーランスで仕事を再開。仕事の一つとして始めた絵地図が人気を博し、今では絵地図師として活躍する。また絵地図の制作からまち歩きのプロ「散歩屋」へと発展。NHK文化センターで人気のまち歩き講座を3クラス持ち、NHKテレビ「こんにちは いっと6けん」の散歩コーナー出演もこなす。著書は『絵地図師・美江さんの東京下町散歩』（新宿書房刊）。

［取材・構成／岩見一太　撮影／月間住宅］